

猫派？

犬派？



犬派？猫派？

俺、犬伏直人、二十八歳。大学などに機器販売の営業やってる。ある研究所で、令花に出会った。

秋風がたち始めた頃、金曜の夕方に、いつもの居酒屋で、令花と待ち合わせた。

「直人、うちのミケちゃん一か月だけ預かってくれない？」

突然、令花が、長いまつ毛を伏せながら言った。

「えっ、うわ。猫なんて、む、無理」

俺は、ノンアルコールビールを吹き出しそうになりながら言った。令花は、酎ハイを勢いよく飲み干すと、グラスをどんと置いて言った。

「急にね、研究所の所長のお供で一か月、ドイツに行くことになったの。新しい薬品の合同研究。そうかあ、無理かあ。直人、今まで楽しい思い出ありがとう。それじゃこれで」

俺は、席を立とうとする令花のバッグを、思わずつかんだ。

「まっ、待ってくれよ。なんでそうなるんだよ」

「だって、そんな冷たい人とはお付き合いできないもの」

「わかった、分かったよ。猫の世話すりゃいいんだろ。餌とトイレ。ただ、アトムがどう言うかなあ」

しどろもどろになりながら、俺は、やっと言った。

「犬は庭で飼ってるんでしょ。別に問題ないじゃない」

「いや、夜とか部屋に入れてるし。あいつ、結構神経質なんだよね。うーん」

俺は、ビールを一口飲んだ。それを見ていた令花は、また、すくっと立ち上がった。

「わかった、じゃあ。楽しい思い出ありがとう。アトムによろしくね」

「ああ、もう、わかった。分かったよ。アトムには、よく言い聞かせるから」

髪をかきむしった俺の前で、令花は、にっこり微笑むと言った。

「じゃあ明日、キャリーとトイレ持って行くね。アトム君によろしく。準備もあるから帰るね」

「まじ！明日？俺、実は猫、苦手なんだよ」

「知ってるよ、よーく。うちのミケちゃん、ちょっと人見知りするけど、おとなしいから大丈夫」

「いや、そう言われても。猫って、わがままで気まぐれだろ。人をこばかにしたようでどうも」
泣きたい俺に、令花は、すまして言った。

「あら、犬なんて飼い主に媚び売って、どうも好きになれないわ」

「アトムは、おれが帰ってきたら、そりゃあ嬉しそうにするんだぜ。たまんないよ。そのために、一軒家借りて、遠距離通勤してんだから」

「ほんとご苦労さまよねえ。直人が『アトム命』なのは、スマホの写真全部柴犬なのでよく分かってるわ。とにかく、一か月よろしくお願いします」

「なにがおとなしいだ。令花め。ほら、ミケ、めしだぞ」

キャリーのそばに、お椀を置く。すると、それをアトムが食べようとする。

「アトム、キャットフードはうまいのか？しかし、情けないからやめてくれよな」

俺は、餌の値段の違いに、改めて驚いた。

(なんなんだ、この格差)

やっと一週間が経ち、ミケも、家の中を歩き回りだした。

「アトム、何ビビってんだ。あっ、目の下の傷、どうした？ミケか！飯食いに行ったんだろ。しかし、猫の爪は、こわいよなあ。それにしても、我慢してるお前はえらい。さすがアトムだ。家来になってやってるもんな」

俺の唯一の高級家具、ラックで爪とぎされるのには、腹が立つより泣けてきた。令花からは、毎日、ミケを案じるメールが来る。ミケより、アトムや俺が大変なんだけど、敢えてスルー。しかし、この頃ミケが、おれの足にスリスリしてくるようになった。ネットで調べると、自分のにおいをつけてるだけらしいけど。なんか「かわいいな」なんて思ってしまう。俺、ちょっとへんだ。

待ちに待った令花の帰国の日。インタホンが鳴ると同時に、俺は飛び出した。大きなキャリーを引いた令花が、満面の笑顔で立っていた。、

「直人、ただいま」

「あー、お帰り」

ミケが飛び出して来て、令花に飛びつき、顔も手もなめまくっている。

(猫なんて飼い主に冷淡だなんて思ってたけど、全然違うよ。犬と一緒にだ)

その様子を見て、俺はつくづく思った。散歩に行こうと、アトムが、リードをくわえている。

「アトム君もありがとう。今から散歩？ついて行ってもいい？」

そう言って、俺の横に並んだ。

「わあ、私にもしっぽ振ってくれてる。ちょっとなでさせて」

「かわいいだろ。ミケちゃんにもすっかり気に入られてるよ」

令花は、アトムをこわごわなでながら、話しかけた。

「ごめんね、ミケって、ほんとは気が強い。迷惑かけたよね」

俺は、吹き出しそうになって言った。

「でもツンデレでかわいい。飼い主と同じだ」

「なによ」

令花は、にらみながらアトムのリードを持った。

「わあ、犬との散歩ってこんな感じなんだ。なんか一体だね。空気がおいしい」

「だろ、だからやめられないんだ。俺、ここんところ営業成績バッチリ」

「ミケ様効果だよ」

並んで歩いていて、俺は、息を止めて、立ち止まった。

「令花、結婚しよう。ミケとアトムと暮らそう」

目を見開いた令花は、急に走り出した。

「アトム走ろう。ずっと一緒だよ」

それを、俺は、ぼーっと見ていた。それから、体中を熱いものが駆け巡った。

「こらまでー」

俺は慌てて追いかける。すっかり冷たくなった風が、汗を冷やしてくれる。

沈んでいく夕日が、令花とアトムの後姿を、輝かせていた。